

【海外学会報告】

2015 年度 第 17 回韓国ケベック学会 参加報告
17^e colloque de l'ACEQ (Association Coréenne d'Études
Québécoises)
Le samedi 24 octobre 2015, Université Hankuk des études
étrangères, Séoul

2015 年 10 月 24 日（土）午後、ソウルの韓国外国語大学にて、韓国ケベック学会（ACEQ）の年次コロックが開催された。今回のメインテーマは「州民投票 20 周年」で、AJEQ 大会でもワークショップで取り上げられたのと同様、ACEQ でもこれが大きな関心と呼ぶテーマとなっていたことが分かる（プログラムの詳細は下記参照）。昨年の伊達聖伸会員に引き続き、今年も AJEQ からの参加は 1 名のみであった。

コロックは、LEE In Sook 会長の開会の辞の後、ゲストスピーカーの Serge CANTIN ケベック大学トロワリヴィエール校教授の「*La Souveraineté dans l'impasse*」というタイトルの発表からセッションが始まった。基本的事項の説明に時間をとり過ぎたため、本題に入ったところで時間切れになってしまったのが残念だったが、ケベックでは 1995 年のレファレンダムの時、家族内での対立さえ起こり、今でもレファレンダム疲れが残っているという指摘は興味深かった。

それに続いて私が「エスニック文化マイノリティに対するケベックの姿勢の通時的展開」*« Evolution chronologique de l'attitude du Québec envers ses minorités ethnoculturelles »* というタイトルで発表を行う機会が与えられた。ケベック政府の移民統合政策を 1970 年代まで遡って年代順に検証するという内容で、当時からの政府文書などを手掛かりに、ケベックが移民をどのような姿勢で受け入れ、移民およびその子孫を社会にどう組み込もうとしていたかを年代順に整理したものである。それにより明らかになったのは、移民の大量受け入れが始まったのが 1960 年代であるにもかかわらず、移民統合政策の必要性が自覚されたのが 1980 年の第 1 回目のレファレンダムの後で、以後そこで示された政策は時の政権によって修正されつつも、大筋では一貫していたことである。しかし、エスニック文化マイノリティを肯定的に認める一

方で、その人々をどのように社会に組み入れるかという具体的政策レベルでは紆余曲折があったことも指摘した（この発表をもとにしてさらに発展させた研究論文が、『ケベック研究』の本号に掲載されているので、関心のある向きはそれをお読みいただきたい）。文学研究者が大多数を占める ACEQ では、こういった内容の発表は少ないのであろうが、興味を持って聞いていただけたようで幸いであった。コメンテーターを務めてくださった JIN Jong Hwa 氏も文学研究者だが、不慣れな内容に的確なコメントをしてくださった。事前に発表原稿の完成版を送り、それを踏まえて JIN Jong Hwa 氏から直前ではあったがコメント内容を知らせていただいたため、心づもりをして返答できたのも幸いであった（誤解のないように申し添えれば、これは私の方からお願いしたことで、韓国ケベック学会から求められたものではない）。

当日のそれ以降の発表は次の通り。CHO Chansoo (Univ. Kangnam) « La sociologie politique et l'économie politique du séparatisme québécois », LEE Jooyoung (Univ. Sungkyunkwan) « Wajdi Mouawad, la réécriture d'un mythe personnel - autour du thème de l'étranger dans *Le soleil ni la mort ne peuvent pas se regarder en face* », SHIN Junga (Univ. Hankuk des études étrangères) « Un regard anthropologique sur la vie urbaine dans *Les aurores montréalaises* de Monique Proulx ».

これらの発表はすべて韓国語だったため失礼して、CANTIN 夫妻と一緒に会場を出て、ベンチに座って1時間くらい討論できたのは収穫であった。教授夫妻は、ケベックの現状について熱心にご自分たちの意見を聞かせてくださり、お2人ともがケベックにおけるフランス語とフラン語系ケベック文化の存続に危機感を抱いておられることがよくわかった。お2人によれば、要するに BOUCHARD 教授は理想主義すぎるということのようである。私が交流のある BOUCHARD 教授や A.-G. GAGNON 教授のような人々とは見解を異にする、フランス語系ケベック人の歴史・文化・伝統を強調する方々と率直な意見交換ができ、その考えを直接聞いたのは意義深いことであった。

加えて特筆しておきたいのは、ACEQ の方々の猛烈な歓待である。到着した日の夕食は CANTIN 夫妻と一緒に、LEE In Sook 会長と HAN Yongtaek 次期会長の招待を受け、大会当日の昼も LEE In Sook 会長はじめ ACEQ のメンバー10人くらいと会食。食事が終わって会場に行くと、今度は HAN Daekyun 初代会長と LEE Jisoon 2代目会長が待ち受けてくださり、ひとしきり小畑先生のことから始まって、これまでの両学会の親密な交流についてお話しいただいた。大会終了後は、初代から時期までの会長が全員揃って参加の懇親

会と2次会。フランス語と韓国語が飛び交うなかで、「暖かい」というより「熱い」歓迎を受けたことが忘れられない。さらには翌日の午前、大学院生1名（日本文化に興味があって、少し日本語ができる人）に3時間ほど観光ガイドまでさせてくださったことを付記しておきたい。

今回、短い滞在ではあったが、ACEQメンバーとの濃密な交流を通して、AJEQとACEQの関係がいかに価値あるものかを肌で感じる事ができた。小畑先生始めこの関係の発展のためにご尽力くださった方々に本当に感謝し、今後もお実り多い関係が続いていくのを切に願う。

（丹羽卓 金城学院大学）